

新開設科目「言語文化」に向けた 現代文・古典のつながりを考える「読むこと」の授業研究

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野 一瀬大樹

1. 研究の背景と目的

高等学校では平成30年度に新たな学習指導要領が告示され、令和4年度から実施される。国語でも大きな科目構成の見直しを実施されるが、新たに開設される「言語文化」において、現代文（文学的文章）と古典の内容が合わせて扱われることとなる。そのため、従来の授業では対応できず、戸惑いを感じていた。

言語文化の学習指導要領を見ると、[知識・理解]の(2)我が国の言語文化に関する事項において「エ 時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解すること。」、また[思考力・判断力・表現力等]において「エ 作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めること。」ということが示されている。ここから「言語文化」では、生徒に現代と古典のつながりを考えさせたり意識させたりすることの重要性が見て取れる。

そもそも今回の学習指導要領改訂では、今までの古典学習について、「日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらない」と示されている。つまり、「現代」と「古典」の関わりを、授業を通して伝えきれていなかったことが問題として指摘されている。一方で「社会の変化による高校生に求められる力の変化」も示されている。様々な知識を取り入れることに比べ、子どもたちが自ら思考したり、他者と協働したりしながら、課題解決を実現する力の育成が重視されるようになり、授業の在り方にも

変化が求められることになる。ここに現代文と古典の内容が合わせて扱われる意義があると考えた。昨今、高等学校における古典嫌いの増加^(注1)が問題視されてきた。筆者自身も教師として現場に立ちながら、年々生徒が古典に興味関心を持ちづらくなる様子を感じていた。今回の学習指導要領改訂における「言語文化」の開設は、このような問題に対する対応を考えるとともに、現代文と古典を合わせて扱うことで、生徒に新たな見方・感じ方・考え方を育成するための授業方法を検討する機会となる。

以上の背景をふまえ、本研究では、生徒が現代と古典の関わりを考え、「今」と「昔」のものの見方・感じ方・考え方のつながりを「言葉を用いて」とらえる力を養うため、新たな授業を提案することを目的とする。

2. 研究の進め方

研究を進めるにあたり、新たな授業としてどのような工夫ができるのかを考えた。そこで検討したのが、現代文と古典を連結させる「比べ読み」の授業である。現代文と古典を比べ読みする中で、現代文と古典の間にある「つながり」に気づかせることができると考えた。

ここで筆者が考えている現代文と古典の「つながり」とは、「同質性」と「異質性」である。同質性とは、現代にいる私たちが見て、古典と変わらないと実感できる「共通点」であり、異質性とは、現代の私たちとは見方が異なる、あるいは時代とともに変化してきた「相違点」である。ただし、同質性も異質性も、今まで同じだととらえていたものが違ったり、あるいは違うととらえていたものが同じであったり、現代と

のつながりを見る視点という意味で一体のものである。あるものごとの一面しか見ていなかった生徒が、複数テキストや意見交流などを通し、多面的に見る視点を獲得し、新たな見方・感じ方・考え方の発見に至る。今まで現代文というくくりで学習してきた文章や表現の特徴、あるいは古典として学習してきた古典常識・知識などを比較することで、共通点、違い、変化、そうなった理由などをとらえ、今の発想にはない新たな見方に行きつくかもしれない。文章比較により、時代・文化による見方・感じ方・考え方のつながりを知り、生徒が自らの見方を深く広くすることが可能になると考えている。

具体的な授業実践方法として、大滝 (2019) の実践例を参考にした。「和歌や随筆に表れた『季節感』を読み味わおう」という単元名に基づき、俵万智『さくらさくらさくら』(『風の組曲』河出書房新社、H12)、薄田泣菫『桜の花』(『大地讃頌』創元社、S4)、『山家集』、『古今和歌集』の4つの教材を比べ読みする授業である。この授業で重要なことは全ての教材を「桜」というテーマで統一していることである。あるテーマに沿って現代文と古典の教材を比べることは、現代に生きる私たちの日常と、古典の世界の接点を見つけることにつながる。生徒の実態に応じた「テーマ」設定と授業実践を試みることで、生徒が現代と古典のつながりに気づくことができると強く期待し、授業実践を検討した。

3. 授業実践

上記のことから計画した授業の実際を、以下の概要・全体計画・授業詳細にまとめる。

・概要

概要は以下の通りである。

- (1) 対象校 山梨県立高等学校
- (2) 期間 2021年9月～10月 全4時間
- (3) 対象 2学年1クラス(31名)
- (4) 教材
 - ・ 和歌三首(新編日本古典文学全集『古今和歌集』『新古今和歌集』・小学館)
 - ・ 『山月記』中島敦(精選現代文B・筑摩書

房)

- ・ 『月下の恋人』浅田次郎(『月の文学館』・ちくま文庫)

(5) 単元名

「月」に関する表現を通して、現代文と古典の見方・感じ方・考え方のつながり・違いを理解しよう。

本教材の教材観、生徒観、指導観は以下の通りである。

① 教材観

「月」は古典作品や和歌で頻繁に詠まれており、日本人にとって古くから大変身近なものとして存在している。また、現代の小説・随想に関しても、「月」を通して四季の移り変わりを感じたり、主人公の心情を投影したりするための重要な要素となっている。来年度から高等学校において新学習指導要領が施行されるのに伴い、新たな科目も創設され、教材ではなく資質・能力の育成という観点で授業を構築する必要が出てくる。「月」が表現された文章を古典から現代まで幅広く読み比べることにより、「古典から現代へと続くものの見方・感じ方・考え方」、また「作品や時代によって変化する見方・感じ方・考え方」に生徒自身が気づき、文章の解釈を深めることができると考えている。

② 生徒観

生徒は今年度に入り、『山月記』『水かまきり』『ころ』という小説教材を学習している。現代文(文学)の授業を参与観察させていただく中で、文学を読む際、文中のどの言葉に着目するかで、読む人が抱く場面のイメージが変化するということを学んでいた。また、言葉によるものの見方を広げるために、文章全体を通して見るか、部分的に見るかで、読む人の言葉の解釈の仕方が異なることも学んでいる。今回は、古典と現代文という時代の異なる作品の言葉を比較することで、「古典と現代文の見方はどのように関わっているのか」「違いや変化はあるのか」を考え、今までの現代文で身につけてきた言葉によるものの見方・感じ方・考え方にさらなるつながりを見出し、文章を深く読む力を培うようにしていきたいと考えている。

③ 指導観

今回の単元では、古典から現代まで様々な形で文章中に表現されている「月」を題材として取り上げ、「月」に関する和歌・小説等を読み比べ、比較して論じたり批評したりする活動を行う。またその活動を通し、古典・現代文の枠を超えた言葉のつながりを生徒に感じさせ、現在使っている言語を通した自らの見方・感じ方・考え方を深めることを目的としている。古典と現代文を合わせて扱うため生徒が戸惑う可能性があるが、ペアワーク等を取り入れながら適切に机間巡視を行い、考えの深まりに留意する。

・全体計画

全体計画は以下の通りである。

第1次（1、2時間目）古×古

和歌三首（『古今和歌集』『新古今和歌集』）の比較を通して、300年を経てもつながる「月」に託した見方を読み取らせる。

第2次（3時間目）古×現

和歌（古典）と『山月記』（現代文）における「月」の表現に託されたつながりに気づかせる。

第3次（4時間目）現×古

「月」が表現された初見の小説教材（『月下の恋人』）を使用し、「月」の見方に関するつながりや違いをとらえさせる。

・授業詳細

授業詳細は以下の通りである。

(1) 第1次（1、2時間目）古×古

第1次の授業は、「☆月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして（古今和歌集）」の和歌を中心とした古典同士の比べ読み授業である。他の二首（「A 夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ（古今和歌集）」、「B 面影のかすめる月ぞ宿りける春や昔の袖の涙に（新古今和歌集）」）と比較し、A、B どちらの和歌が☆の和歌と関連が深いのかを考える授業になっている。どの和歌も月を詠んだものではあるが、「☆月やあらぬ〜」と「A 夏の夜は〜」は時間経過を示すという共通点、「☆月やあらぬ〜」と「B 面影の〜」は本歌取りでつながる関係性をとらえること

ができる。特に☆とBの和歌は、成立に300年の隔たりがあるにも関わらず、月に「恋」を託している点で「つながり」があることに気づかせるという狙いを持って授業を行った。

授業は主にペアワークで行った。ワークシートを配り、和歌同士にどのようなつながりがあるのかを考えさせるのだが、その際、ペアとなる二人にそれぞれ異なるヒントが書かれたプリントを配布した。ヒント1はそれぞれの和歌の詞書、ヒント2は和歌が載せられている和歌集の名前・部立・文法を示している。そのヒントをペアでつなぎ合わせながら関係性を考えることで、生徒自身が和歌のつながりに関する様々な可能性を検討できるように工夫している。

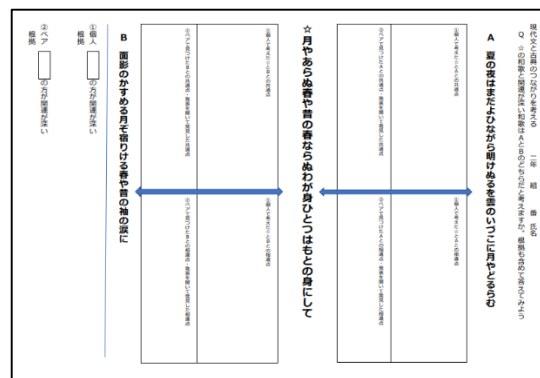


図1 第1次使用ワークシート

「☆月やあらぬ〜」は在原業平が藤原高子を思って詠んだといわれる有名な歌で、百人一首にも載せられている。業平が託した「恋する心情」が、月の表現を通して読み取りやすい和歌である。ペアワークではどのペアも部立の「恋」というヒントに着目し、「☆とBは内容面の関係性が深い」ということを読み取っていた。最終的には全体での共有を行い、☆とAとの対比から「時間経過」を表す効果があること、また☆とBとの対比から本歌取りという修辞法を通して「恋する心情」が重ねられていることをつかませ、和歌同士の関連性に気づかせた。

この第1次は、第2次に行う「現代文と古典の間に、表現を通したつながりを見つける」という授業に向けた橋渡しである。300年を隔てて成立した表現につながりを見出すことを次時へのステップとし、「現代文」と「古典」の比

べ読みに対する生徒のハードルを下げることを意識して実施した。

(2) 第2次 (3時間目) 古×現

第2次は、古典の月の表現と現代文の月の表現を比べ、イメージや託されたもののつながりを言葉を通して考える授業である。第1次で学習した和歌三首を用いて、生徒が今年度5月に既習している『山月記』との比べ読みを実施した。第1次の授業を通じて、月の表現に「時間経過が示される」あるいは「心情が託される」ということをつかませており、現代文でも同じような効果を見出せるのか、ということを中心に生徒に考えさせるようにした。

『山月記』は“俊才李徴が自尊心・羞恥心を抱える中で、虎へと姿を変えていく”物語である。月の表現には「時間」や「心情」が託されており、古典との共通点からつながりを感じることができる。一方でイメージされる心情は「恋」ではなく「人間性の喪失」という違いも存在している。

以下に『山月記』における月の表現で、「人間性の喪失」を象徴する箇所を挙げる。

○残月の光をたよりに林中の草地を歩いていた時、はたして一匹の猛虎が叢から躍り出た。

○時に、残月、光冷ややかに、白露は地にしげく、樹間を渡る冷風はすでに暁の近さを告げていた。人々はもはや、事の奇異を忘れ、肅然として、この詩人の薄幸を嘆じた。

○虎は、すでに光を失った月を仰いで、二声三声咆哮したかと思うと、また、元の叢に踊り入って、再びその姿を見なかった。

残月の光の弱まりが、時間の経過とともに李徴の人間性の喪失を象徴している。ワークシートをもとにペアで話し合わせ、最終的にはホワイトボードで発表し、クラス全体で月の表現効果について検討した。出された意見を見ると、図2や図3のように、第1次で学んだ和歌の表現と同じく、月が心情や時間を表すことをとらえることができていた。またその心情が恋ではなく人間性の喪失であるということも理解することができていた。

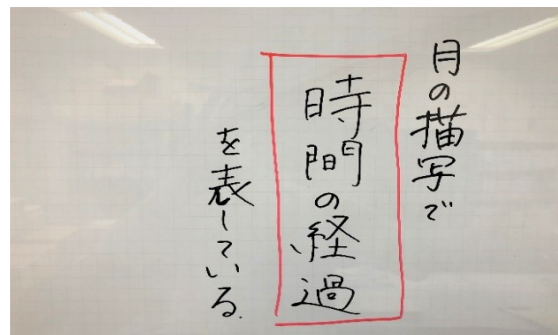


図2「時間経過」の読み取り例

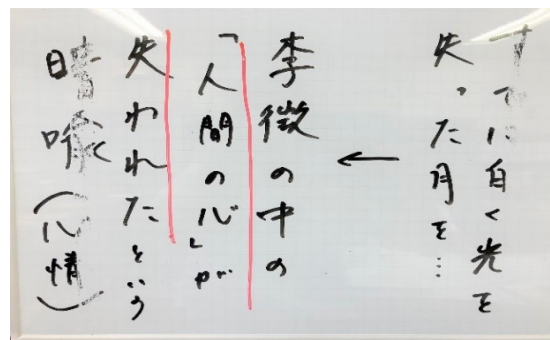


図3「心情」の読み取り例

これらのことから、生徒が古典で学んだ月の表現効果を現代文でも活かし、つながりを考える中で「同質性」「異質性」をとらえることができたと感じた。文学における月の表現には、託されたものやイメージさせるものがあるが、古典から変わらない固定的(慣用的)な見方もあれば、作品毎に異なる独創的な見方が存在することもある。表現の多様なとらえ方に気づかせることができた授業であったと実感している。

(3) 第3次 (4時間目) 現×古

第3次は、初見の小説教材『月下の恋人』の一部を生徒に読ませ、①まず読んだ文章の後に続く展開を考え、②その展開であれば、この部分の月の表現にはどのような意味があるのか、またどのようなものが託されているのか、考えさせる授業を試みた。生徒に読ませた部分は、“恋人がドライブして、海沿いの宿に泊まるシーン”であり、次のような月が描かれている。

○鬱蒼とした木下闇の道が、海まで下っていた。ハンドルを切り返しながらようやく坂道を下りきると、月あかりに照らされた平屋造りの宿が、まるで誰かがそこに置いていったように忽然と姿を現した。

麓の向こうには岬の断崖が迫っており、入

江の一軒宿であるとわかった。夜空にはそれまで僕の見たこともない、**赭い満月**がかかっていた。

○「話があるんだけど」

と僕は言った。

「あとでね。ごはんがすんでから」

雅子は悲しい目で**入江の空にかか**る月を見つめた。

①で、読んだ文章に続く展開を考えさせ、生徒がその展開と関連させて月の表現をとらえることを狙っていた。もちろん、展開が変われば月の表現の意味も変わるため、様々な見方が出てくる。展開に合わせて、第1次や第2次で学んだ、古典や『山月記』と共通点を持った「慣用的な使われ方」、この小説独自の「独創的な使われ方」に気づくことができれば、現代文と古典のつながり考える視点を身につけられていると理解してよいと考えていた。実際の生徒の意見を見てみると、「赭い」という表現や「悲しい目」という表現に着目し、2人に別れが迫っているという意味で展開を考えた生徒が多かった。しかし、別れを切り出すのは男なのか女なのか、その後どのような結末を迎えるのか、それぞれ異なっていた。中には病気による別れ、女が「月の人」で離れる運命にある、といった展開を考えたグループもある。しかしそれぞれが、「月の表現」を登場人物の心情や時間経過に関連づけながら読みを深めてくれていた。その時に出された生徒の意見を以下にまとめる。

○心情に関わる意見

- ・2人の「別れ」「関係の終わり」をイメージさせる。
- ・「切ない気持ち」「さみしさ」「悲しさ」が託されている。
- ・主人公の何らかの「決意」を表す。

○時間経過に関わる意見

- ・別れるまでのタイムリミットを表している。
- ・2人のターニングポイントである。

○その他の意見

- ・旅館をスポットライトのように照らす。
- ・月明かりが宿の静けさを強調している。

全4時間の授業を通し、着実に現代文と古典を月の表現を通してつなげようという見方が

培われていると実感できる授業となった。

4. 分析結果・考察

以下の4つの資料をもとに分析を行った。

○事前アンケート（第1次前）

○授業プリント（第1次後）

○授業プリント（第2次後）

○事後アンケート（第3次後）

・分析結果

(1) 生徒の授業のとらえ方

授業前後の生徒の変化を確かめるため、アンケートを実施した。まずアンケート項目の中の一つの質問、「現代文と古典の文章を二つ並べて授業で扱うことをどう思いますか」という問いに着目して前後を比較したところ、肯定的意見・否定的意見に分けることができた。記述式のアンケートであったため、肯定的意見は「おもしろい・楽しい・良い・わかりやすい」等、否定的意見は「大変・難しい・混乱・不安・嫌だ」等の文言で分類を行っている。結果は表1の通りである(注2)。

表1 授業に関する肯定・否定の割合

事前アンケート	
肯定的	55% (16人/29人)
否定的	59% (17人/29人)

↓

事後アンケート	
肯定的	87% (26人/30人)
否定的	13% (4人/30人)

事前では肯定的意見・否定的意見が半々程度であったが、事後アンケートでは肯定的意見が90%近くまで伸びている。授業を行う前は、「面白そうだが混乱しそう」「楽しそうだが理解が大変そう」といった声が多かったが、授業後にはほとんどの生徒が肯定的に受け止めてくれたことがうかがえる。また、もう一つ注目すべき点がある。それは、事後アンケートに「気づく」や「発見する」という文言が多く見られたことである。この授業を通して、生徒が現代文と古典のつながりに気づき、月の表現について新たな発見をしたことがこの結果からも読み取ることができた。なお、この結果を裏付ける

ためにテキストマイニング^(注3)を用いて単語の使用頻度も分析している。こちらでも、肯定的な意見が多くなっていることが示された。

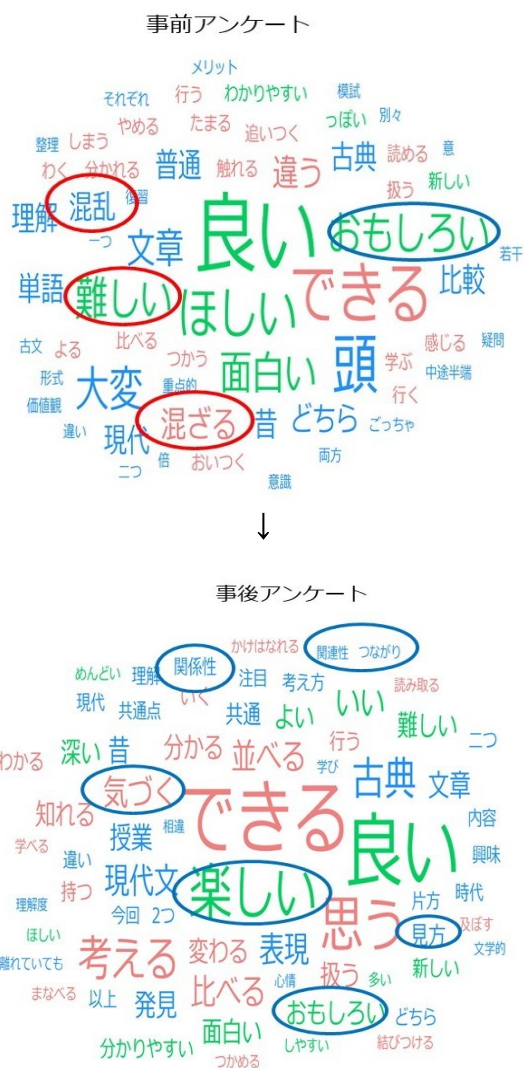


図4 アンケート単語使用頻度の変化

(2) 生徒の記述の分析

授業に関して生徒は概ね好意的にとらえていることが分かったが、大切なのは「月」の表現を通して、現代と古典のつながりに気づき、見方・感じ方・考え方を深め広げることができたのか、ということである。ここでは事前と事後のアンケートの記述の変化に加え、授業プリントでの記述内容を分析し確認してみたい。

まずは事前と事後に行った生徒のアンケートの記述の変化から、「理解の深さ」を表2のような指標で分けた。Iの理解が深く、IIIの理解が表面的だという形で分類している。

表2 「理解の深まり」を見る指標

「理解の深まり」を見る指標	
I	現代文と古典のつながり（同質性・異質性）を「表現を通して」とらえている。
II	現代文と古典に「関係性」があることまで言及できている。
III	内容まで言及はできていないが、「好印象」である。

この指標をもとに、事前・事後のアンケートの記述内容を確認してみた。表3～表5が分類毎の人数とそれぞれの記述例である。

表3 ①事前肯定→事後肯定のアンケート記述例

	人数	事前・記述例	事後・記述例
I	2	良いと思う。	時代が変わることで表現にも違いがでたり、逆に時代が変わっても同じような表現があることを現・古合わせて行うことで気づくことができたので、とても楽しかったです。
II	4	面白そうだと思う。	思っていた以上に並べてみると関係性があって考えさせられた。何年も離れていても共通点はあると分かった。
III	2	普通の古典よりわかりやすそうなので良いと思う。	もの見方が深まるので良いと思う。

表4 ②事前否定→事後肯定のアンケート記述例

	人数	事前・記述例	事後・記述例
I	1	今までしたことがないので難しそう。	今と昔を文学的に比べられておもしろい。共通のもあれば相違点もあることを知る。
II	14	いつもは分かれているので同時に行うことは少し難しく、大変だと思う。	現代文と比べることで、より古典が理解しやすくなったと思う。昔の人の考えがより分かるので、とてもおもしろかった。

Ⅲ	2	場合にもよるが私は頭がおいっかないと思う。	楽しい、理解できると昔と今を比べられたので分かる面白かった。
---	---	-----------------------	--------------------------------

表5 ③事前否定→事後否定もしくは記述の意図が明確でないアンケート記述例

事前・記述例	事後・記述例
意識することが倍になるのでイヤですね。	よくないと思う。
頭が混乱すると思います。	今と昔で表現の違いはさほどないことがわかった。 (記述の意図が不明確)

上記からも分かるように、①事前アンケートでも事後アンケートでも肯定的に授業をとらえている生徒、②事前では否定的であったが事後には肯定的にとらえた生徒、また③最後まで否定的だった、あるいはその意図が読み取れなかった生徒、それぞれ授業に対するとらえ方に違いはあるものの、事後アンケートの理解の深まりにはばらつきが見られた。しかし、授業プリントでの記述内容を合わせて確認してみたところ、アンケートでは十分な深まりが見えない人でも、授業での記述内容には月のつながりを深くとらえるような記述があった。

①Ⅲの記述例を書いた生徒の授業プリント

- ・ 月に対する見方が時代を超えて同じなときがあり、しかし同じ時代でも全く異なるというのが面白い。

②Ⅱの記述例を書いた生徒の授業プリント

- ・ 和歌の中で月が使われているが、意味するものや表現するものが異なっていた。でもどちらも現代に通じるところがあると気づき、とてもおもしろかった。

また、最後まで授業に否定的だった生徒、記述の意図が読み取れなかった生徒も授業では次のように記述している。

- ・ いつの時代も月は時間を表したり恋を表している。
- ・ 月によって心情の違いが生じることが分かった。(日本文化と他文化で違う)

このように、授業を肯定的にとらえた生徒も否定的にとらえた生徒も、授業内で現代と古典を月の表現を通して見方・感じ方・考え方を深

めていることを確認することができた。

今回、事後アンケートに比べて授業内の記述内容に理解の深まりが見て取れるのは、一つにはアンケートの記入時間の短さが挙げられると考える。アンケートは最後の授業で実施しており、記入するための十分な時間を取ることができなかった。生徒は自分の考えをしっかりと練って記述することができなかったと推測される。また、もう一方ではアンケートの問い方に工夫が必要であったという反省もある。アンケートでは「現代文と古典の文章を二つ並べて授業で扱うことをどう思いますか」という問いをしているが、どう思うか、だけでなく「なぜ」そう思うのか理由まで問うことができれば、より深まりを感じられる記述が出てきたかもしれない。今後の研究では注意していきたい。

授業を含めて生徒全体の記述内容としては、現代文の月と古典の月につながりを発見したことに対する驚きなどが多く書かれていた。しかし、「自分自身」が月をどのように見ているのか、あるいは自分の月のとらえ方と現代文・古典の月のとらえ方を比較するような姿勢は見られず、自分自身の月のとらえ方を内省したような記述は見当たらなかった。授業の反応でも感じたが、現代では月を眺めたり愛でたりする機会が少なくなり、興味関心が弱くなっていることに一つの要因があるのではないかと感じている。しかし、普段は気づかなくても、古来日本文化に根付き、現代に生きる我々の心にも「月」を愛でる気持ちは備わっている。古典とのつながりを感じるために「月」をテーマにすることの意味は大いにあると感じた。

(3) 考察

今回、「月」をテーマに現代文・古典の比べ読み授業を実施した。初めて試みた授業であるが、生徒は意欲的に取り組み、反応は概ね好意的であった。特に、月に関する表現を通して、現代文と古典の中の「同質性」「異質性」を読み取ることができたことに手ごたえを感じている。当初、目的としていた「現代と古典の関わりを考え」ること、あるいは『「見方・感じ方・考え方」を広げる』ことに迫る結果であり、現代文と古

典を連結して授業を行う意味はあると考える。

また、今回現代文・古典を比べ読みする中で、当初狙った目的ではないが、「現代文」「古典」それぞれの文章を読解するための読み方、注意すべき点に生徒が自ら気づくという効果も発見することができた。現代文であれば「表現」に着目した読み方である。作品の違い、登場人物の心情や場面の違いにより、同じ表現でも表現の持つ意味が変わってくる。現代文は心情や展開に注目しがちであるが、表現に着目することで見方が変わるという生徒の記述が多く見られた。一方、古典（歌）は「修辞法」に着目した読み方になる。今回の授業では本歌取りを中心に扱ったが、修辞法により、時代を経ても意味のつながりを作ることができ、短い語数でも意味を広げることができることに生徒自身が気づいていた。現代文と古典を比べて読むことが、現代文・古典それぞれの読み方への気づきにつながり、論理国語・文学国語・古典探究等の授業へとつながることになる。その意味でも、今回の研究の意義を感じている。

「言語文化」で現代文・古典が合わせて扱われることは、現場にとって戸惑いが大きい変化である。しかし今回の研究で新たな授業方法・授業改善を考えることにより、生徒の資質・能力を伸ばす効果的な授業を提案することができたと感じている。もちろん今回の授業にはまだまだ改善の余地がある。「月」は現代と古典の同質性（共通点）が見えやすいテーマであるが、異質性をとらえやすい他のテーマも検討することで、生徒の見方・感じ方・考え方を広げることが可能だろう。「家族」や「婚姻」といったテーマを設定すれば、生徒が現代と古典の違いの中から変わらないものを発見し、異質性から現代とのつながりを考えることも可能となる。変化を否定するだけでなく、授業改善のチャンスととらえ前進し続けることが、教師に大切な資質であると改めて強く感じる事ができた。

5. 今後の課題

来年度、この研究をもとにしながら、まずは授業実践を重ねていきたい。今回の授業実践で

は現代文と古典のつながりに気づけている生徒は多かったが、生徒自身の見方と文章での見方の違いに気づかせることはできなかった。生徒に「理解の深まり」を作るためにはどのような授業改善が必要なのか、考えていきたい。また「月」以外で現代文・古典を関連付けられるテーマを広く検討し、授業が単発で終わらないよう、つながりを意識した年間計画の検討も必要となる。生徒の資質・能力を育むための授業であるということを忘れず、生徒の気づきを作るため、さらなる研究に励みたいと考えている。

注1 『平成17年度高等学校教育課程実施状況調査』参照

注2 31人クラス、事前アンケート実施時に2名、事後アンケート実施時に1名欠席している。また、肯定的意見も否定的意見もともに延べ数となっている。

注3 テキストマイニングは自由形式で記述された文章を単語や文節に分割し、その出現頻度や相関関係を表す。文字の大きさは出現頻度の多さを表し、色は品詞を表している。

引用・参考文献等

- ・大滝一登 (2018) 『高校国語新学習指導要領をふまえた授業づくり理論編』, 明治書院
- ・大滝一登 (2019) 『高校国語新学習指導要領をふまえた授業づくり実践編』, 明治書院
- ・日本国語教育学会監修・町田守弘他 (2018) 『新科目編成とこれからの授業づくり』, 東洋館出版社
- ・文部科学省 (2018) 『高等学校学習指導要領解説 国語編』
- ・文部科学省 (2018) 『教育課程部会第105回配布資料』
- ・ユーザーローカル テキストマイニングツール
<https://textmining.userlocal.jp/>

謝辞

最後に、本研究を行うにあたり、ご協力いただいた実習校の先生方、生徒の皆さん、またご指導いただいた教職大学院の先生方に、この場を借りて深く感謝申し上げます。